



活動報告書

令和7年度

ひとり親家庭等の
こどもの食事等支援事業

2026年3月18日

中間支援法人
認定NPO法人フローレンス

中間支援法人フローレンスの活動について

1. 事業概要・スケジュール・実施体制

事業概要

対象エリア

**関東甲信越
10都県**

助成数

105施設

助成総額

約1.5億円

人員体制

3ユニット制で伴走の質を高め、伴走支援や精算を確実に支援

A)伴走支援ユニット：約5名で交流会など実施

B)精算管理ユニット：約10名で申請・精算を確認

C)自主活動：保育園などを起点に、約20名にて
こども食堂、こども宅食、パントリーを実施

事業スケジュール（R7年6月～R8年3月）

6月

要綱・申請フォーム準備、県社協等と事業周知開始

7月

公募（7/1～13）、説明会開催、審査・選考委員会、採択団体決定
・公表（7月末）

8～9月

助成団体の食支援事業開始、随時相談対応（LINE・対面）
中間報告実施、団体への個別伴走支援

10月

中間報告審査（～10月13日）、精算内容チェック
各県交流会・伴走研修の企画、調整、個別伴走

11月～1月

各県交流会・伴走研修の実施・個別伴走支援

2～3月

最終実績報告・審査、各助成団体への助成額確定（～3月末）

2. 広報活動 —これまでつながりのなかった団体の広報—

すでにつながりのある団体のみならず、これまで情報が届いていなかった地域の団体へも広く周知するため、地域の様々な機関を通じた多層的な広報を展開

1 県社会福祉協議会からの周知 ★新規開拓

関東甲信越10都県の社協（地域福祉課・ボランティアセンター等）を通じ、自治体・市区町村社協・地域ネットワーク団体を経由して地域の民間団体へ情報を波及。

2 自治体への個別周知 ★新規開拓

千葉県・埼玉県・神奈川県等、新規で連携した自治体へ個別に声かけを実施。子ども家庭課等の窓口を通じた周知を依頼。その際、児童福祉部署だけでなく、地域福祉や孤立孤独支援担当なども展開を依頼。

3 全国児童家庭センター協議会 関東ブロック連絡会

千葉14・神奈川21・長野6など計52ヶ所の児童家庭支援センターへ公募情報を発信。専門支援機関とのつながりを活用した新規開拓を実施。

4 自団体ネットワーク

過去の助成団体（関東甲信越内64ヶ所）・事例共有会参加者・弊団体ホームページおよび公式SNS（公式LINE含む）を通じて発信。

5 こども食堂・フードバンク等のネットワーク団体

★新規開拓

こども食堂の全国・都道府県単位のネットワーク団体、フードバンクの連絡会、全国小規模保育協議会、あたらしい保育イニシアチブ等の広域ネットワークを活用し、従来リーチできなかった団体へも情報を届けた。

広報のポイント

- ▶ 社協や自治体などの地域ネットワークを活用した多層的な周知
- ▶ 児童家庭支援センターへの個別発信で新規団体を開拓
- ▶ 全国ネットワーク団体経由で従来リーチできなかった団体へも到達

3. 中間支援法人の役割・伴走支援

③ 都県ごとに交流会・セミナーを実施

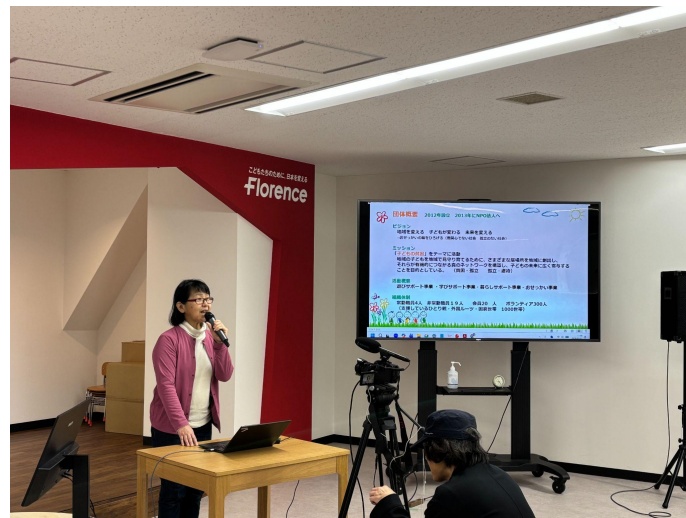
「困窮家庭へのリーチ方法」「見守り継続の工夫」などをテーマに、**地域集合型・オンライン交流会を実施**

自治体・児童家庭支援センター・社協との合同勉強会も開催



④ 交流会での講演をオンライン配信

③の交流会では、各地区のキープレイヤーや福祉の専門家を招いて講演会を実施。この講演の内容を**録画にて各団体へオンライン配信を行う**。



4. 市区町村との連携支援 ー活動伴走から自治体との連携などー

目指すゴール：助成団体が要支援家庭の情報を自治体と共有しながら適切な支援につなぎ、継続して見守ることができる「地域のネットワーク」の構築

(i) 申請時の連携

- 市区町村社協・自治体から地域団体へ当助成について広報協力依頼
- 中間支援団体として地域活動団体の活動内容など詳細を把握できるよう努める（連携先など協力の座組を助言）
- 各県の社会福祉協議会や自治体に外部審査を打診要請

(ii) 採択後の連携

- 助成した各都県ごとに助成団体のリスト（活動場所・活動内容）を作成
- 市区町村担当者・市区町村社協へリストを配布
- 要支援家庭への情報提供・連携に活かしてもらうよう働きかけ

(iii) 活動中のサポート

- 都県社協等と地域での交流会・セミナーを共同開催
- 「自治体との連携を進めたい」などの相談があった場合、対応策など協議・伴走
- 必要に応じてこども家庭庁とも連携

5. 各県での交流会・伴走支援の実施 一対面での対話で繋がりを一

長野県 ~長野県社会福祉協議会との連携~

「経験の差を学び合いのチャンスに」

長野県社会福祉協議会と連携して、
「まちづくり・ボランティアミーティング2025~信州の未来を」内で実施

- ・「地域資源・連携」をテーマに対等なダイアログを実施
- ・5名が参加申し込み（長野県の全ての助成団体）
- ・成果を長野県社協と共有

神奈川県 ~県庁・社協・児家センが参加~

「地域リーダーズ交流会 in 神奈川」

神奈川県庁・神奈川県社協・児童家庭支援センターかわわが協力

- ・認定NPO法人たまりばによる講演（調査レポート報告／助成団体）
- ・16名が参加申し込み
- ・SOSキャッチ機能の再認識とネットワーク構築を議論

東京都 ~フローレンスのオフィスにて開催~

「地域リーダーズ交流会 in 東京都」

助成団体・フローレンス・子ども家庭庁の3セクターが一同に

- ・豊島子どもWAKUWAKUネットワーク栗林さんが講演（助成団体）
- ・22名が参加申し込み
- ・自治体連携の実践事例を共有（チラシ後援・情報共有の取組み等）

新潟県 ~新潟県社会福祉協議会との連携~

「地域共生社会のフクシ的アップデートを語ろう」

新潟県社会福祉協議会とのコラボ開催

- ・新潟県の市町村社協や他県社協も参加（41名が参加申し込み）
- ・重層的支援体制整備事業でモデル的取り組みを行う三股町社協が講演
- ・パネルディスカッション：NPOピーカブー/新潟県社協が登壇

5. 各県での交流会・伴走支援の様子

長野県

「まちづくり・ボランティアミーティング2025～信州の未来を」



神奈川県

「地域リーダーズ交流会 in 神奈川」



東京都

「地域リーダーズ交流会 in 東京都」



新潟県

「地域共生社会のフクシ的アップデートを語ろう」



6. 本助成事業・交流会などの振り返り／助成団体からの「生の声」

(参加した助成団体のアンケート回答から)

伴走支援の企画目的である下記の成果が出た：

- ・地域の団体同士の情報交換や連帯の醸成
- ・新しい視点や学び、振り返りを得られるきっかけ作りについて

- 県内の児童家庭支援センターの支援員さんのお話から、虐待のニュースを聞く事がありますが、日本の子どもの心が不健康の数字にショックを感じました。その後の家族支援という発想は、日々そう感じる事ばかりで、**解決ではなく抱えながら一緒に地域にいる事の大切さを再確認**できました。
- 当団体は、地域ネットワークの事務局も担っていますので、**新たな県内の団体と関係づくり**が出来たことと、団体の悩み等もお聞きすることができ貴重な時間でした。
- いつもありがとうございます。**個人情報**をどう扱うかなどに迷っており、そこら辺のサポートやノウハウがあれば教えて頂きたいです。
- 支援する側の困りごとを解消し、**支援者をより支援していけるよう周りとのつながり、協力を強めていきたい**と感じました。
- 保護者支援で重要なことは、**保護者が自立（＝頼れる先を増やす）**していけるようにサポートすることだと思うので、**地域での横のつながりの重要性**を改めて感じました。
- 今回のように**横のつながりを感じられるような座談会**などは**各地域にある課題解決の糸口**になると思いました。
- 各団体様のお話を聞き、それぞれの活動の強みを知ることができて良かったです。「活動の原動力は何か？」という質問で、今までの活動を振り返ることができたように思います。忙しい日々ですが、振り返る時間も大切だと改めて感じました。

6. 本助成事業・交流会などの振り返り／助成団体からの「生の声」

(参加した助成団体のアンケート回答から)

今後に向けての中間支援組織としての課題感：

- 本事業の財源としての不安定さ
- 目の前で放って置けない親子のために駆けつける民間に「依存している」部分がないか？
国・自治体・専門機関が本気でどう関わるか？

- 我々の悩み等、実態を行政に伝えて欲しい
- 社会問題が多く、民間団体だけで頑張るにも限界がある状況です。ぜひ、行政、政府にも現状を通して色々な支援を出して頂くなど働きかけをお願いしたいです。
- 登壇者のお話を聞いて既存の行政支援の形と住民主体の活動の乖離を一刻も早く解決しないと隙間から溢れていく命を救うことができない焦りを感じています。この構造は変わらないのでしょうか？このまま民間ボランティアに現場を任せ続ける前提を変えてほしいです。福祉の仕事は後方支援や形式上の事務作業に多くの有為な人的・時間的資源が潰れてしまうのではないかと懸念しています。行政には宮崎県三股町社会福祉協議会さんのような働きぶりをぜひお願いしたいです。地域支援の現場では、裕福な家庭ではなく庶民のおばちゃんが当事者として、母親として、ママ友として、助け合っていたことが形として支援活動になっているだけです。仕事としてどこからも給料が出ているわけでもなく資金の後ろ盾がありません。望まぬ妊娠、養育費の不払い、精神疾患、女性の自殺が増加傾向で、困ってる人を死なせないため、事件を未然に防ぐため、歯を食いしばってなぜ自分がと思いながら誰もやらないからどうしようもなく頑張っています。子ども家庭庁の食支援事業が終わっても、繋がりを持った我々は、バイトをしても資金を稼がなければなりません。でも自分の生活があり相当に困っています。その件を行政に相談するところがありません。区議会議員に相談しても、行政の相談支援体制の改善は行われず、現場はボランティア任せで何年も変わりません。子ども家庭庁の予算で潜在的な困りごとを解消できるのか、補正予算はつくのでしょうか？

助成団体：OIKOSの活動について

東京大学（東京都文京区）などの大学内での活動

1 OIKOS : 事業実施内容

➤ 事業実施内容 (R7年助成期間中)

実施形態

子ども食堂／大学内での活動

実施回数

月2～4回、延べ18回

利用者数

約20名程 (延べ487人)

食事の合計提供数

487食

事業目的

- ・こども食堂を通じて、こどもと一緒に食事をすることを入口にした継続的な関係づくり
- ・社会福祉協議会との連携を通じて、困難事例が発生した時は行政サポートにつなげる

大学内での活動の様子



2 OIKOS：事業の推進に当たって工夫したこと、力を入れたこと

➤子どもにとって「行くのが楽しい場所」に

活動開始の背景

- 炊き出し活動から、家庭環境の課題を実感
- 子どものときからのアプローチの必要性を感じ活動を開始
- 在籍している大学内でのこども食堂の開催を考える

活動で大切にしていること

- 「一緒にご飯を食べる」ことを入口に少し年上の人との質の高い交流
- 子どもにとって「行くのが楽しい場所」にすること
- 利用家庭に変化があった時は、社協と連携

大学生の強みの活用

- 「大人」よりも距離が近い存在
- 近所のお兄ちゃん・お姉ちゃんのような存在

利用家庭にとっての
レスパイト機能にも

9:30-10:00

事前講習会

初参加の大学の方に活動レクチャー

10:00-10:30

打ち合わせと準備

活動場所でのレクリエーション準備

10:30-11:00

子どもたち集合・移動

活動

大学正門に集合 → 食堂へ移動

11:00-11:30

自己紹介・顔合わせ

活動

学内での遊び

11:30-13:00

昼食

活動

大学内の食堂に移動して昼食

13:00-15:30

活動・外遊び

活動

室内や外遊び

15:30-16:00

片付け・子ども解散

16:00-16:30

大学生：振り返り・解散

活動内での気がついたことなど記入

4 OIKOS：活動を通じてのこどもの変化

➤ 活動を通じてのこどもの変化（小学校中学年の「さとし君」（仮名））

変化のプロセス

参加当初

活動中もスマホを見てしまう、コミュニケーションが苦手

1～2ヶ月

活動時に2人体制で継続的に関わる

2～3ヶ月

心を開き始め、活動中は自らスマホを手放すように

3～6ヶ月

自ら遊びに誘うなど積極性が出てきた

現在

活動時に変化が感じられるまでに成長

外遊びでの写真



5 OIKOS：行政等との連携について

➤ 変化に気づいたら共有できる関係へ

文京区社会福祉協議会との連携

- 文京区子ども宅食利用家庭（経済困窮家庭等）や児童相談所の家庭などに活動を周知（利用者の約半数が対象家庭）
- 文京区社会福祉協議会・文京区担当者と継続的にコミュニケーションを実施

その他の取組み

- OIKOSのスタッフ（大学生）に活動終了後にアンケートを実施
→ 虐待など気になるポイントがあれば、文京区社会福祉協議会に情報共有できる仕組みを整備
- 活動スタッフに「子どものSOS受け止めて」（文京区社会福祉協議会作成）を配布して、気になるポイントの共有体制を構築

外遊びでの写真



6 OIKOS：困難事例について

➤ 対応が難しかった事例と工夫した点

困難な事例

- こども同士の金銭トラブル
- 活動内のルールをどこまで設定するのかの葛藤
- 外部からどこまで介入すべきか、対応方針を模索中

虐待発見時の情報連携体制（今後）

- 子どもや家庭の変化を発見した場合、具体的な対応フローを整備中
- 文京区社協・行政と連携した情報共有の仕組みを構築予定

その他の困難事例（教育熱心な家庭）

- 中学受験を強く意識した家庭の子どもが参加
- 昼食を急いで食べ、塾へ向かう様子を継続的に観察

移動中の写真



今後の対応方針

困難事例が発生した際の行政・社協との情報連携フローを整備し、「地域の見守りネットワーク」としての機能強化を目指す

F こどもたちのために、
日本を変える